

研究余滴

レポートに見られる不適切な語と表現 －誤用例集－

梅林 博人

1. はじめに

学生から提出されるレポートを読んでいると、次の《》のような不適切な表現を見受けることがある。

例1 大阪の言葉に《あっという間に》慣れてしまった。

例2 調べ方が《甘く》、あいまいな点が多い。

こうした表現の使用は、レポートの質を低下させる一因となるので早急に改善されることが望ましい。

しかしながら、日本語の話し言葉と書き言葉の区別に苦慮することの多い留学生にとっては、ある語句がレポート用語として適切なのか否かを判断することは容易なことではない。そのため、留学生を対象とするレポート指導では、『論文ワークブック』に載る「論文で使ってはいけない語と表現」（5頁）のような誤用例集が、日本人学生の場合以上に、有効なものとなってくる。

ところで、その「論文で使ってはいけない語と表現」では、レポートや論文における不適切な語や表現を、

- (1) 終助詞
- (2) 縮約形
- (3) 擬声語・擬態語
- (4) 他の話し言葉
- (5) 筆者についての知識がないとわからない表現

のように分類して呈示しているのであるが、これを見ていると、(4)については、さらに用例を求めておくことが適當であろうと考えられてくる。

なぜなら、(1)～(5)の内、(4)以外は、「終助詞」等々の具体的な見出しがつけられるようなものであるため、どの種の表現を指摘しているのか

が比較的理 解しやすい。そのため同書にある用例を見るこ とで、注意すべき表現についての類推がおおよそ可能と考えられる。ところが、(4)の場合、「その他」という名称からも察せられるように、そこには多様な表現が含まれている。そのため、同書の用例のみでは注意すべき表現の全体像が推し量りにくく、自然、これら以外にどのようなものがあるのかという疑問がわいてくると思われる所以である。

そこで、今回、以上のような意図から、学生のレポートで実際に使用された不適切な語や表現の収集を試みた。その結果が、以下にあげる誤用例集【レポートに見られる不適切な語や表現】である。

2. 凡例

次章であげる誤用例集の凡例は、以下の通りである。

- a. ()つきの番号に続けて不適切な語や表現の用例をあげ、不適切と考えられる部分を《》で示す。
- b. 「→」に続けて修正例をあげ、修正した部分を〈〉で示す。削除による修正については〈削除〉と記す。修正例を複数記す場合は改行して〈〉部分のみを並記する。なお、修正例はあくまで一案である。
- c. 必要に応じて「*」に続けて備考を記す。
- d. 用例の配列は、《》の語についての50音順である。ただし、《～な気もした》、《～のが大好きな》は、「気もした」「大好き」とみて配列してある。
- e. 用例は、女子短期大学1年生および男女留学生1年生～3年生のレポートより収集したが、記載にあたっては、紙幅、文脈、誤表記などの都合から適宜修正を施した。
- f. 『論文ワークブック』とその付録（解答冊子）にあげられている例は取りあげていない。

3. 誤用例集の呈示

以下、誤用例集【レポートに見られる不適切な語や表現】を呈示する。

【レポートに見られる不適切な語や表現】

(01) 大阪の言葉に《あっという間に》慣れてしまった。

→ 大阪の言葉に〈すぐに〉慣れてしまった。

(02) 調べ方が《甘く》、あいまいな点が多い。

→ 調べ方が〈不十分で〉、あいまいな点が多い。

(03) 《今いち》はっきりしない。

→ 〈今ひとつ〉はっきりしない。

(04) 《いろんな》角度から見る必要がある。

→ 〈いろいろな〉角度から見る必要がある。

〈さまざまなもの〉

(05) 《えらく》複雑である。

→ 〈非常に〉複雑である。

(06) 授業を受けた《おかげで》レポートの書き方も分かってきた。

→ 授業を受けた〈ことによって〉レポートの書き方も分かってきた。

(07) 丁寧に教えてくれた《おかげで》レポートに対する恐怖感が少なくなった。

→ 丁寧に教えてくれた〈ので〉レポートに対する恐怖感が少なくなった。

(08) 《かれこれ》一年前になる。

→ 〈およそ〉一年前になる。

(09) 日本語を安心して使える《気がする。》

→ 日本語を安心して使える〈ように思われる。〉

(10) 悩みも多そう《な気もした。》

→ 悩みも多そう〈に思われる。〉

(11) こうして成り立っているものは《けっこう》ある。

→ こうして成り立っているものは〈(意外にも) 数多くある〉
〈(意外にも) 多数存在する〉。

(12) 《こうやって》見てみると

→ 〈このようにして〉見てみると

(13) 《この辺》の使い方がわかりにくい。

→ 〈このような〉使い方がわかりにくい。

(14) 《これだと》よく分からない。

→ 〈これでは〉よく分からない。

(15) 日本語を《しゃべる》時

→ 日本語を〈話す〉時

(16) 《ずっと》使われてきた。

→ 〈長い間〉使われてきた。

(17) その《せい》であろうか。

→ その〈ため〉であろうか。

(18) 《そう》最近のことではない。

→ 〈それほど〉最近のことではない。

(19) 今では《そうそう》使われない。

→ 今では〈それほど頻繁には〉使われない。

〈あまり〉使われない。

(20) 《そうやって》互いに豊かになっていけばよい。

→ 〈このようにして〉互いに豊かになっていけばよい。

(21) 《そんなに》違和感なく

→ <それほど> 違和感なく

(22) 異文化を取り入れる 《のが大好きな》 人種

→ 異文化を取り入れる <ことを大いに好む> 人種

(23) 《たまに》 聞き返される。

→ <まれに> 聴き返される。

(24) 《だんだん（と）》 その方言がうつてしまい

→ <次第に> その方言がうつてしまい

<徐々に>

(25) 《つい》 最近

→ <ごく> 最近

(26) その場合の意味は、(イ)…。(ロ)…。(ハ)…。《という感じである。》

→ その場合の意味は、(イ)…。(ロ)…。(ハ)…。<である。>

(27) <どう見ても> この二つは性質が違う。

→ 《明らかに》 この二つは性質が違う。

(28) (イ)…、(ロ)…、《とまあだいたい》 この二つである。

→ (イ)…、(ロ)…、<など、およそ> この二つである。

(29) 私が 《なるほどと思ったのは》

→ 私が <納得したのは>

(30) 小学生の頃 《なんか》 は

→ 小学生の頃 <など> は

(31) 指の呼び方 《なんて》 決まっているものだと思っていた。

→ 指の呼び方 <などは> 決まっているものだと思っていた。

(32) 《なんと》短縮語とされていた。

→ 〈意外にも〉短縮語とされていた。

(33) 《はっきり言って》難しい。

→ 〈削除〉難しい。

* 「はっきり言って」「本当(のこと)を言うと」「何と言ったらよいか」など、不要な注釈表現は書かない。

(34) 種類の多さに《びっくりした》。

→ 種類の多さに 〈驚いた〉。

(35) 二つの意味を《ひっくるめた》用語が必要となる。

→ 二つの意味を 〈ひとつにまとめた〉用語が必要になる。

(36) 今ひとつ 《ぴんとこない》。

→ 今ひとつ 〈実感がわからない〉。

〈実感が伴わない〉。

(37) ~という 《ふうに》定義されている。

→ ~という 〈ように〉定義されている。

(38) レポートを書くことが《下手である》。

→ レポートを書くことが 〈苦手である〉。

〈得意ではない〉。

* 留学生の文章に多く見られる表現。文字通り下手であることをいう場合ではなく、うまくできないので苦手としているという文脈で使われていることが多い。

(39) 《下手をすると》言葉自体が残っていない場合すらある。

→ 〈場合によっては〉言葉自体が残っていない場合すらある。

(40) この少數の用例を《ほうっておく》ことはできないだろう。

→ この少數の用例を〈無視する〉ことはできないだろう。

〈看過する〉

(41) 《またまた》擬態語である。

→ 〈ふたたび〉擬態語である。

(42) 《まるっきり》根本から違う。

→ 〈まったく〉根本から違う。

(43) 関西弁を押しつけていく《みたいな》風潮

→ 関西弁を押しつけていく〈ような〉風潮

(44) 文章を《みんな》の前で読む。

→ 文章を〈全員〉の前で読む。

(45) 《もっと》考察する点はある。

→ 〈さらに〉考察する点はある。

(46) オノマトペが《やたらと》出てくる。

→ オノマトペが〈ひんぱんに〉出てくる。

(47) こうしたアクセントは母が使う《やつ》である。

→ こうしたアクセントは母が使う〈もの〉である。

(48) 非常に《ややこしい》ものである。

→ 非常に〈複雑な〉ものである。

(49) 同じ結果が得られたが《……。》

→ 同じ結果が得られたが、〈この結果については検討する必要がある。〉

* 読み手の推測に頼らねばならないようなぼかした表現はせずに、明言する。

(50) 少し例をあげる《と……。》（以下に例示が続く）

→少し例をあげる〈削除〉。（以下に例示が続く）

* 不要な語や記号は書かない。

4. おわりに

以上の用例を見ることで、文章表現指導をどう効果的に行うべきか等々、考
えるべきことはいくつかあるが、それは機会を別にすることとし、ここでは気
づかされた点を記して終えることにする。

それは、「書き言葉」という言葉についての解釈の違いである。たとえば、『論文ワークブック』には「論文では書き言葉を使う」とある（5頁）。この場合、指導する側は「書き言葉」を非常に狭い意味で使用しており、「書き言葉の中でもかたい表現」という意味で用いていると考えられる。しかし、一方の学生たちは、この場合の「書き言葉」でも、それを「文字化された表現」と広範にとらえているようである。それを示す端的な例が、先例(49)(50)の「……」という表記である。これらは確かに話し言葉ではないが、しかし、先で言う「書き言葉」には含められないであろう。このように、「書き言葉」に対する理解が双方で必ずしも同一ではないと考えられるのである。

そして、このことから筆者などが反省させられるべき点は、「書き言葉を使う」という場合、文字化された表現にもレベル差があること、レポート・論文などを書く場合は、専攻分野のテキストなどを参考にすべきこと、等々をあわせて伝える必要があるという点である。特に、冒頭でも記したように、話し言葉と書き言葉の区別に苦慮する留学生にとっては、「書き言葉を使う」とのみ言うことは十分ではないことを反省させられた次第である。

参考文献

浜田麻里・平尾得子・由井紀久子（1997）『論文ワークブック』くろしお出版